

# 神の声 VS 神への祈り

初詣で神社を訪れる人も多かろう。特に信仰があるわけでもないのに、何気にお賽銭を上げたり、お祈りしたりする。かくいう私も節操無く、いろんなところでお参りしているのだが、「神々のしらべ」を聴いて、八百万と言われる日本の神様がそれぞれに個性的なエネルギーを持っていることを認識した。超ユニークなこのアルバムは16の神様のメッセージを音楽で表したものだ。Ikukoの操るクリスタル・ボウルによる倍音浴のようなサウンドがまず浄化作用を及ぼす。ベースとなっているのは雅楽だが、笙に弦楽四重奏が合わさると、弦楽器からオーラが立ち上っているように感じられ、コンピューターの打ち込みによる低音ドローンのような力強いリズムと箏が合わさって、軍楽隊のようなサウンドが出現する。暖かい光を持ったIkukoのヴォイスは時にわらべうたや子守唄のようにやさしく、またブルガリアン・ヴォイスのように大地のエネルギーを表現する。神は男性であり、女性であり、情熱的だったり、ユーモラスでもある。鳥の鳴き声や水音など神社のサウンドスケープも混ぜられ、まるで神社に参拝している気分になる。願い事も叶いそう。(最後のトラックはナレーション付き擬似参



神々のしらべ 日本の神様と言霊

Ikuko、稲葉明徳、東野珠実、吉野裕司、他



祈りの海へ…/伊藤えり

拝!) 超雅楽な音楽を表出した作曲の吉野裕司の手腕に脱帽。

笙という楽器単独の音の魅力を伝えることがCD制作の原点にあったという伊藤えりのアルバムが、「祈りの海へ…」をテーマにしたことは、興味深い。笙は光の楽器だ。途切れることなく和音が奏されると、豊かな倍音とともに人や自然の生命力や希望が溢れてくる。日雇い労働者の町、山谷にあるマザー・テレサの志を継ぐホスピス「きぼうのいえ」に出会ってこのCDができたことは偶然ではないだろう。古典の雅楽も入っているが、高橋全の清らかな水を思わせるピアノとともに笙を奏で、江原啓之が朗読する聖人の言葉や読経が静かに響き合っていて、時代や宗教を超えた祈りが現れる。音霊は届けられた。

どちらのアルバムでも、笙と倍音が神様のエネルギーがこもった音霊を乗せる船になっている。エンターテインメント性も備えた「神々のしらべ」はより一層繰り返し聴きたいアルバムと言えよう。

(田中美登里)

音霊対決

●神々のしらべ 日本の神様と言霊 ヴィジョンナリー・カンパニー/VCCD-001/3,360円

●祈りの海へ… napi music/NAPI-007/2,800円